

V「難波地区」について

- ・ここでは、「高島屋」(南海ビル)より南側の地域を取り上げることとする。
- ・いわゆる「大坂三郷」の外周部にあたり、「難波村」と称されていた地域で、明治時代までは伝統野菜を中心とした近郊農業(畑作)地帯であった。
- ・江戸時代には、現在「難波パークス」がある場所に、災害時の救援米を貯蔵する幕府の「難波御蔵」が置かれ、その水運を担うため新たに開削された「難波新川」があるだけで、その周りもネギ畑が広がっていた。
- ・この地域が開発され、ミナミの顔として歓楽街へと発展するのは、明治18年(1885)に「阪堺鉄道」(現・南海電鉄)が、難波～大和川間に開通して以降のことである。

「難波御蔵」と「難波新川」

- ・「難波御蔵」は、享保17年(1732)の”享保の大飢饉”のあと、幕府直轄の救援米貯蔵施設として翌・享保18年に設置されたもので、同年5月には米運搬船用に道頓堀川から分流する新しい水路として「難波新川」(長さ473間半、幅8間)が開削された。
- ・「難波御蔵」は、南北324m・東西126mの広大な敷地(甲子園球場の約3倍)に、米蔵8棟が設けられていた。
- ・明治時代になってその役目を終えた「難波御蔵」は明治30年(1897)に解体され、その跡地は、専売局煙草工場から「大阪球場」となり、現在は「なんばパークス」となっている。
- ・「難波新川」はその後(明治12年)、南の「いたち川」まで延伸されたが、昭和34年(1959)には埋め立てられ、現在は阪神高速道路・環状1号線が走っている。

「難波地区」の町名の推移

明治時代	現在
難波新地5番町	難波5丁目
難波新地6番町	
河原町1丁目	難波千日前
河原町2丁目	
蔵前町	難波中2丁目 (浪速区)
日本橋筋2丁目	日本橋2丁目
日本橋筋3丁目	
御蔵跡町	
西関谷町1丁目	日本橋西2丁目 (浪速区)
西関谷町2丁目	
広田町	

明治時代	現在
船出町1丁目	難波中3丁目(同)
船出町2丁目	敷津東1丁目 (浪速区)
北高岸町	
敷津町1丁目	
敷津町2丁目	元町1丁目 (浪速区)
元町1丁目	
元町2丁目	

明治時代	現在
日本橋筋2丁目	日本橋3丁目 (浪速区)
日本橋筋3丁目	
日本橋筋4丁目	
東関谷町1丁目	日本橋4丁目 (浪速区)
日本橋筋4丁目	日本橋5丁目 (浪速区)
日本橋筋5丁目	
東関谷町1丁目	
東関谷町2丁目	難波中1丁目 (浪速区)
新川1丁目	
新川2丁目	
新川3丁目	難波中3丁目 (浪速区)

明治時代	現在
元町2丁目	元町2丁目 (浪速区)
元町3丁目	
元町4丁目	
元町5丁目	元町3丁目(同)
敷津町1丁目	敷津西1丁目 (浪速区)
敷津町2丁目	
大国町1丁目	
大国町2丁目	

- ・明治30年(1897)の大阪市第1次市域拡張によって、西成郡難波村全域と今宮村・木津村北部等が大阪市に編入され、明治33年(1900)の大字改編で新しい町名が成立した。
- ・上記のうち、河原町1～2丁目・蔵前町・新川1～3丁目・元町1～5丁目はもと難波村、東関谷町・西関谷町・広田町・船出町・北高岸町・敷津町はもと今宮村、そして敷津町・大国町はもと木津村に属していた地で、その他はもと大坂三郷(南区)の町であった。
- ・大正14年(1925)4月の大阪市第2次市域拡張によって、もと西成郡区域が「浪速区」に分区され、昭和55年(1980)の住居表示改正により、現在の町名となった。

1. もと「難波御蔵」の跡地

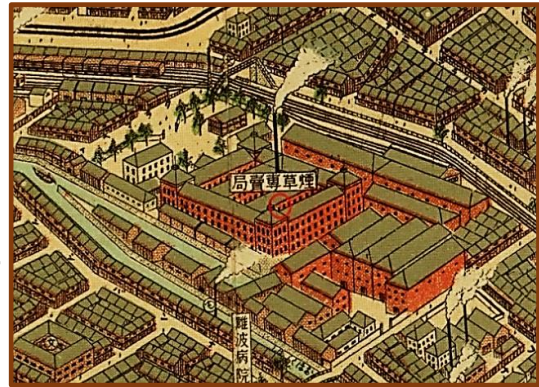
蔵前町→現・浪速区難波中2丁目

(1)「専売局・煙草工場」

・明治30年(1897)に解体された「難波御蔵」の跡地には、大蔵省専売局(のちの「日本専売公社」、現「日本たばこ産業(JT)」)の煙草製造所が設けられた。

・明治37年(1904)7月に煙草製造が専売制となり、全国5箇所に設置された煙草製造所の一つで、当時の両切煙草の「ゴールデンバット」や口付紙巻煙草の「敷島」・「朝日」等が製造された。

・戦災で灰塵に帰したが、昭和25年(1950)、その跡地に「大阪球場」が建設された。(南海電鉄の東側に、昭和24年(1921)6月、「専売公社・大阪地方局」が設置された。)



(2)「大阪球場」(大阪スタジアム・ナンノ 浪速区難波中2丁目

・昭和25年9月、パ・リーグ「南海ホークス」のホームグラウンドとして、「大阪球場」が建設され、開場した。グラウンド広さは、両翼84m、中堅約116m、収容人員3万1千人で、狭さから「投手泣かせの球場」と呼ばれた。(昭和47年、両翼91mに拡張)また、狭い敷地に極力多くの客席を設けるため、内野スタンドを急傾斜(37度)に設計したことから「すり鉢球場」とも言われた。



・一方、昭和26年には、関西地区の球場で初めて夜間照明設備が設置された。
・1950～60年代は、鶴岡一人監督のもと蔭山・杉浦・野村・広瀬・スタンからの活躍もあって毎年優勝争いを行うといった南海ホークスの黄金期であり、都心の球場で繁華街に近いこともあって連日多くの観客でにぎわった。(1951、'53、'55、'59、'61、'64、'65、'66年にリーグ優勝、'59、'64年には日本一に。)

・しかし、その後は成績が低迷したこともあって年間観客数が50万人を切り、球団そのものの身売り話が持ち上がって、昭和63年(1968)には「福岡ダイエーホークス」として、本拠地も「平和台球場」に移された。しばらくは、近鉄バッファローズの準本拠地として使われたが、平成3年からはグラウンド内に住宅展示場「なんば大阪球場住宅博」(下記)が設置された。

(関西国際空港の建設開始に伴って難波地区再開発計画がたてられたが、バブル崩壊などにより計画実施が延期されたことによる。)

・平成10年(1998)10月に、さよならイベントとして「野球フェスタ」が、南海OBや少年野球選手らを招待して開催された後、解体撤去工事が始まり、平成15年には大規模複合商業施設の「なんばパークス」として生まれ変わった。

(「なんばパークス」の2階広場には、大阪球場のピッチャーズプレートとホームベースがあった位置に記念のモニュメントとプレートが設置され、9階には「南海ホークスメモリアルギャラリー」として球団の沿革を示す展示コーナーも設置されている。)

・この間、いくつかのエピソードが残されているが、今も野球ファンに語り継がれる「江夏の21球」の舞台もこの球場であった。

昭和54年11月、パ・リーグで優勝したのは近鉄バッファローズであったが、その本拠地である藤井寺と日生両球場が狭いことから、広島との日本シリーズ第7戦はここ大阪球



場で行われた。1点差で迎えた9回裏にマウンドに立った広島江夏が、自ら与えた四球もあり無死満塁のピンチを迎えたが、スクイズを咄嗟の変化球で外して得点を許さず、後続も絶って21球で日本一を勝ち取ったというもの。

・複合娯楽施設としての活用

都心にあり交通の便が良いこともあって、プロ野球の対戦がない日には、球場で人気スターのイベントやジャイアント馬場・アントニオ猪木らのプロレス、白井義男のボクシングタイトルマッチなどが開催され、球場内外には色々な娯楽施設も併設された。

球場内のイベントとしては、西城秀樹、尾崎豊、チェッカーズ、サザンオールスターズといった日本人スターのほかサイモン&ガーファンクル、マイケル・ジャクソン、マドンナといったスーパースターのスタジアム・コンサートが開かれている。

球場のスタンド階下部分には文化会館(昭和30年開館)が設けられ、土井勝の料理教室が開かれていたほか、ビリヤード場やインドアゴルフ場(ともに昭和26年開場)、卓球場(昭和29年開場)もあり、後には中央競馬の場外馬券売場である「ウインズ難波」も置かれていた。また、球場側にはスケートリンクやゴルフ練習場もあった。

「大阪スケートリンク」(もと船出町1丁目49)

球場の南東側に昭和27年12月、縦58m・横25mのアイススケートリンク(夏季にはローラースケート場に)を持つカマボ型屋根のスケートリンクが開設され、一般市民のほか福徳相互銀行アイスホッケー部が練習や試合に使用していた。

「なんばゴルフセンター」

その南側には、東西に広がるゴルフの打ちっ放し練習場(西側に打席)があった。

その跡地には後に、西側に「ヤマダ電機」(NAV11なんば)が建てられ、東側は一時「なんば住宅博」として使われていた。(後述・参照)

(3)「なんばパークス」 浪速区難波中2丁目10

・大阪球場跡に、南海電鉄が中心になり平成11年から2期に亘る工事で開発した複合施設で、施設全体として「緑との共存」をテーマに、「なんばパークス」(商業棟)と「パークスタワー」(オフィス棟)及び「屋上庭園 パークスガーデン」で構成され、南西部に隣接して「ザ・なんばタワー<タワーレジデンス・イン・なんばパークス>」(マンション)がある。第1期工事は平成11年11月に着工し平成15年10月に開業、第2期工事は平成17年6月に着工し平成19年4月に全館開業している。

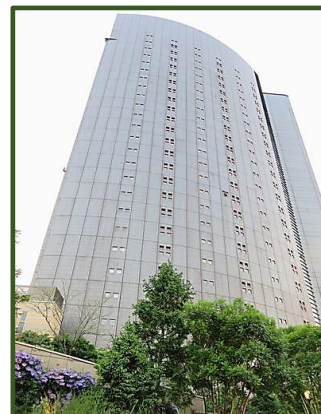
「なんばパークス Shops&Diners」

・地上10階、地下3階建ての商業ビルで、地上部分は段丘状に建てられて3階以上は屋上庭園と連結している。大きくは1~5階が物販、6~8階は飲食店舗で、6~8階にシネマコンプレックスの「なんばパークスシネマ」がある。

また、1階部分は、隣接する商業施設「なんばCITY」南館との共同ショッピングモール「なんばカーニバルモール」であり、2階庭園部で南海なんば駅と連絡されている。



「屋上庭園 パークスガーデン」



「パークスタワー」

「パークスタワー」

・地上30階、地下3階建て(高さ150m)のオフィスビルで、平成19年8月の竣工。

「屋上庭園 パークスガーデン」

・「なんばパークス」の3階から9階に段丘状に広がる屋上庭園で、総面積は11万㎡に及び235種類、約4万株の樹木や草花で包まれている。

エントランスは「なんばパークス」の2階にある。

「ザ・なんばタワー ～タワーレジデンス・イン・なんばパークス～」

・46階建て超高層分譲タワーマンション(344戸)で、平成19年8月竣工。デッキで「なんばパークス」と直結している。

2. 南海電鉄の開通と「高島屋」

(1)南海電鉄の開通と「難波5丁目1」

・明治18年(1885)12月29日、難波～大和川間に阪堺鉄道が開通した。前日での開業式の様子について朝日新聞によれば、“難波停車場ホームで磯野府知事の祝辞に続いて松本社長が答辞を述べたあと招待者は大和川停車場まで2往復した。この日の招待者には高島陸軍中将・奥少将も含まれ、南北の芸妓百人以上が接待し、住吉・大和橋停車場では祝餅が振舞われた。”旨、報じられている。

・この阪堺鉄道が明治31年(1898)10月に「南海鉄道」となったもので、明治36年3月には和歌山市駅まで全通したが、当初は汽車での運行で、難波～浜寺間で電車運転を開始したのは明治40年8月であった。

・日本初の私鉄駅舎である難波停車場は2代目まで木造2階建てであったが、明治44年(1911)10月完成の3代目駅舎が石造2階建て駅舎となり、昭和7年(1932)7月に現在の「南海ビルディング」が建設され、同ビルに「高島屋大阪店(本店)」が開業した。

・その後、昭和12年に天下茶屋駅までの高架化と翌13年には高架複々線化が完成したため、なんば駅は櫛形ホーム9面8線の高架駅となった。さらに3期に亘る改良工事で、昭和55年にホームが200m近く南側に移動し(これにより、「南海ビルディング」は全館「高島屋百貨店」となる。)、平成23年4月には駅関連施設を含めた全面リニューアル工事が完成して、現在の姿になった。

・この間、平成2年、駅上に「南海サウスタワーホテル大阪」が建設(平成15年「スイスホテル南海大阪」に改称)され、駅の下層部には、昭和53年に、大型商業施設「難波CITY」がオープンしている。(後述・参照)

・現在の「なんば駅」は、プラットホームが3階部分にあり、1階北口から3階北改札口までの間は、左右に2台ずつのエスカレーターが配置された大階段で結ばれている。ホームは9番乗場まであり、1～4番乗場は高野線、5～9乗場が南海本線(和歌山市と関西空港行き)に分けられており、9番乗場には空港特急「ラピート」が発着する。

改札口は、3階にある北改札口がメインになっており、3階で高島屋とスイスホテル南海大阪に直結し、地下に降りて地下鉄(大阪メトロ御堂筋線・四ツ橋線・千日前線)や近鉄、阪神電鉄との乗り換え、地下商店街への連絡路となっていることから終日賑わっている。そのほか2階に、高島屋やなんばCITY本館に直結する中央改札口となんばCITY南館やなんばパークスのキャニオンストリートに直結する南改札口がある。



大正時代の3代目駅舎

<参考>大阪メトロ(地下鉄)の開通

・御堂筋線…昭和8年(1933)＝梅田～心齋橋間。昭和10年10月＝難波まで延長

- ・四つ橋線…昭和40年(1965)10月＝西梅田～花園町間開業。
- ・千日前線…昭和45年(1970)3月＝新深江～野田阪神間開業。

(2)「高島屋百貨店」(岸もと難波新地六番町)

・昭和7年(1932)7月になんば駅のターミナルビルとして建設された「南海ビルディング」(地上7階・地下2階建て)は、久野節の設計による乳白色のテラコッタタイルが特徴のコリント様式建築で、平成13年1月に国の登録有形文化財に登録された。

建設にあわせて同ビルに日本初の冷暖房を装備した百貨店として「高島屋南海店」が開店し、昭和14年には同・長堀店を閉店・併合して大阪店となった。

・前述のように、昭和55年11月以降はなんば駅が南側に移され、同ビルは高島屋の店舗となった。

・平成18年秋から建物の増床・外装改修と店舗の改装工事が順次実施されており、平成21年には駅との間の広場にあった旧・「ロケット広場」が「ガレリアコート」として整備され、平成23年3月に全館がグランドオープンした。

また、この工事で南海・なんば駅の改札口に直結した出入口が本館3階に新設されている。



(3)「スイスホテル南海」難波5丁目1

・南海電鉄・創業105周年事業としてなんば駅の上に建てられた「南海サウスタワービル」(地上36階・地下3階。高さ147m)内に、平成2年3月、「南海サウスタワーホテル大阪」として開業し、平成15年9月に日本初のスイスホテル(旧スイス航空グループ)である「スイスホテル南海大阪」としてリファインオープンした。

・スイートルーム・エグゼクティブルームを含む全546室。7つのレストラン&バー、18の宴会場&会議室、スパ&フィットネス、チャペルなどを有している。

・隣接する高島屋とは5階で直結し、専用エスカレーターにより南海・なんば駅改札口とも結ばれている。

(4)「南海会館ビル」と「なんばスカイオ」難波5丁目1

・昭和32年、南海電鉄の本社ビルとして難波駅西隣に8階建ての「南海会館ビル」が新築されたが、老朽化もあり、難波地区の国際観光都市としての発展と都市機能の充実を目的に建替えられることになり、平成30年9月に超高層複合商業ビルとして「なんばスカイオ」が竣工した。

なお、建替えに先立って南海電鉄本社は「なんばパークス」の南側に新築された「南海難波第1ビル」(平成25年2月竣工・後述)に移転した。

「なんばスカイオ(Skyo)」

・平成30年9月に竣工した地上31階・地下2階建て(高さ150m)の複合商業ビルで、9階までの低層部は飲食店や金融、商業サービス施設、13階以上はオフィスゾーンとなっている。低層部では、訪日外国人が関心を持つ日本の伝統・文化を中心にフロアごとにコンセプトを設定し、堺市の伝統産業である堺刃物の店舗も入っている。

また、3階でなんば駅と4階は高島屋、5階はスイスホテルとそれぞれ直結している。

・計画当初は「新南海会館ビル」という仮称だったが、一般投票で「なんばスカイオ」に決定されたが、その名称には、関西国際空港に直結する難波のランドマークとして、世界の「空(Sky)」と大阪(Osaka)の頭文字を組み合わせ、「世界中の人が大阪に集って国際交流の「輪」が広がるように」という意味が込められている。

(5)「なんばシティ」 難波5丁目1

・なんば駅の改造工事にあわせ高架下に開発されたショッピングセンターで、昭和53年11月に第1次開業、昭和55年3月に全館開業(約290店舗)した。

蔵前通りを挟んで本館(地上2階・地下2階)と南館(地上2階・地下1階)がある。
・平成23年以降、リニューアル化が繰り返されており、平成28年3月に本館、4月に南館が現在の姿にリニューアルされた。

(6)地下商店街「NAMBAなんなん」

・高島屋の北側地下・大阪メトロ「なんば駅」南改札口付近から高島屋東側沿いに伸びる地下街で、昭和32年(1957)12月に大阪初の地下街「ナンバ地下センター」として完成し、昭和42年に「ナンバなんなんタウン」と改称、さらに平成18年11月に全面リニューアルされて現在の「NAMBAなんなん」に改称された。

67店舗を数え、南端に「なんなん広場」がある。

(7)「葵稻荷神社」 浪速区難波中2丁目10

・南海電鉄の高架下西側(「なんばパークス」の東向い)に、赤鳥居が並ぶ正一位神社が祀られている。江戸時代、「難波御蔵」に置かれていたようで、昭和25年、旧大阪球場の「なんばカーニバルモール」完成にあわせて、「商売繁盛の神様」として新しいお社で奉祀されが、由緒は不詳。正面に、さわると福があるとされる「福かえる」も。

3. 「なんば南海通り」(なんば千日前通り)南部の歓楽街

・なんば南海通りは、高島屋北東角から東へ堺筋へと延びる通りで、クロスする南北の千日前筋付近には、「なんばグランド花月」をはじめ吉本興業系列の劇場やビルが多く集まり、若者や中国などからのインバウンド客の人気スポットになっている。

(1)「SWINGヨシモト」(もと「なんば蕪濤」千日前12

・昭和14年(1939)4月、なんば南海通りに「大阪花月劇場」(実演劇場)として開場し、吉本の主力であったが、昭和21年9月に洋画専門館「千日前グランド劇場」となった。
・昭和38年7月、「グランドボードヴィル」を謳い文句とした吉本の新しい劇場「なんば花月劇場」として模様替えし、朝日放送と中継契約を結んで演芸や吉本新喜劇のテレビ中継が始められた。
・昭和50年には地下に映画館「花月シネマ」も併設されたが、昭和63年5月、建物の老朽化に伴って閉鎖され、その跡に「SWINGヨシモト」が建設された。

「スイング(SWING)ヨシモト」

・跡地には平成2年3月に「スイング吉本ビル」(地上7階・地下1階)が新設され、1階はゲームセンター、2階には「ニューミュンヘン・南大使館」、3階に登山用品の「好日山荘」が店を構え3・4階に同社が運営するボルダリング用のクライミングジム「グラビティリサーチ」が設けられている。「ニューミュンヘン・南大使館」は昭和46年に千日前で開店していた店を、平成21年に移転してきた。

(2)「YES-NAMBA」難波千日前12

—「NMB48劇場」、「よしもと漫才劇場」、「ワッハ上方」—

・平成8年、「スイングヨシモト」ビルの東隣(入口は千日前筋)に竣工した地上7階・地下1階建ての複合ビル。

地下1階に「NMB48劇場」、1階に「ドンキホーテ・難波千日前店」、1～3階には「ジュンク堂書店千日前店」、5階に「よしもと漫才劇場」、7階に「ワッハ上方」が入っている。

「NMB48劇場」

・平成23年正月、地元アイドルグループ「NMB48」のホームグラウンドとしてオープン。劇場内には、いす席233席がありステージと客席は約2mと非常に接近している。ステージは高さ50cmと低く、ステージ上は3×3に分割され、それぞれ独立して約1mまでせり上がるようになっているが、他と違い花道が設けられていない。

・「NMB48」は、秋元康プロデュースによる「AKB48」(秋葉原)と「SKE48」(名古屋・栄)に続く地元密着のアイドルグループとして平成22年10月に結成された。

「よしもと漫才劇場」

・吉本の若手芸人用お笑いの劇場として「baseよしもと」(平成11年9月開館)があったが平成22年12月に閉館し、当ビル5階にあったもと「ワッハホール」を改装して「5upよしもと」として再スタートさせたものであるが、平成26年にリニューアル化し、現在は「よしもと漫才劇場」となっている。

上方演芸資料館「ワッハ上方」

・平成8年11月、横山ノックが大阪府知事であった時に、上方演芸に関する資料の収集保存施設として、同ビルの4～7階に「大阪府立上方演芸資料館」(通称:「ワッハ上方」)が開設された。

橋下知事時代に見直しがはかられ、移設案も検討されたが、規模を縮小して存続させることになり、演芸場の「ワッハホール」はビルオーナーであった吉本興業の直営館に移管し、資料館「ワッハ上方」は7階の1フロアーに縮小された。

(3)「なんばグランド花月」(通称 難波千日前11

・「なんば花月」(前述)の老朽化に伴い、昭和62年11月に新築開場された吉本興業の新たな”笑いの殿堂”。固定席は858席で、吉本新喜劇は、基本的には毎日ここで公演される。(平日は2回、土日祝日は3～4回公演)

・地下1階には、多目的劇場の「YES THEATER」があり(平成27年開設)、1階には”エフエムちゅうおう”のサテライトスタジオが設けられている。

「YES THEATER」は、新たな情報発信ランドマークとして誕生したもので、総客席324席の劇場に高品質を誇る音響・照明設備を備え、通信機能も重視した新型劇場としてのコンセプトを持つ。

・1階に「よしもとエンタメショップ」、2階には「よしもとおみやげもん横丁」もある。

(4)「吉本興業」の歴史

・明治45年(1912)4月、吉本吉兵衛・せい夫婦が、天満天神近くの寄席「第二文芸館」で、寄席経営の第一歩を記す。

・大正4年(1915)、南地法善寺の「蓬莱館(旧・金沢亭)」を買収し、「南地花月」に。「第二文芸館」を「天満花月」と改称するなど、寄席「花月」が誕生する。

・大正6年、本拠を南区東清水町に移転し、「吉本興行部」を発足させる。

・大正10年、桂春団治を吉本専属とする。東京に進出し、「神田花月」を設ける。

・昭和5年(1930)、横山エンタツ・花菱アチャコの新コンビが誕生し漫才ブームが。

・昭和13年、「通天閣」を買収。→昭和18年、通天閣を解体し軍需資材に献納。

・昭和21年、「吉本株式会社」(東京吉本)を設立。大阪と東京の劇場経営を分離。

・昭和28年、本社を南区河原町1丁目(現・難波千日前:吉本会館の一部)に移転。

・昭和32年、梅田に「梅田グランド開館」を新築し、「梅田花月劇場」と映画館「梅田グランド劇場」を開場。→平成4年、うめだ花月跡に「SWINGうめだ」竣工

・昭和35年、心齋橋筋(心齋橋筋2丁目5)に「吉本ビル」竣工。(S38～:本社を)地下に”おしるこさろん”「花のれん」を開店(^昭和54年・閉店)

・昭和38年、西日本最大の58レーンを持つ「ボウル吉本」オープン。

昭和40年、屋上に「吉本ゴルフセンター」開場 → 昭和49年・閉場

昭和42年、中2階に「吉本ビリヤード」開場 → 昭和61年・閉館

・昭和44年、笑福亭仁鶴、桂三枝、横山やすし・西川きよし、ザ・パンダ(桂文珍、月亭八方、桂きん枝、小染)、中田カウス・ボテンらが全国でブレイク。

・昭和56年、明石家さんま・島田伸助らの「オレたちひょうきん族」がスタート。

・昭和57年、タレント養成の「吉本総合芸能学院(NSC)」を開校。「ダウンタウン」ら。

・昭和62年、中央区難波千日前11に「吉本会館」がグランドオープン

「なんばグランド花月(NGK)」、「NGKホール」、ディスコ「デッセ・ジェニー」

・平成24年(2012)、「吉本会館」を「なんばグランド花月ビル」としてリニューアル。

(5)「オリオン座」、「新オ河原町2丁目(現・浪速区難波千日前4)

- ・「なんばグランド花月」南側通りを東に入った所に2つの映画館が並んでいた。成人映画が上映され、ヌードショーもあったようである。
- 跡地には、平成29年4月オープンの「アパホテル・なんば駅東」(380室)が建つ。

4. 「千日前道具屋筋商店街」と「でんでんタウン」

(1)「千日前道具屋筋」浪速区難波千日前

- ・千日前筋の南端から”なんさん通り”に抜けるアーケード商店街で、両側に業務用を中心に厨房・調理器具や什器類を扱う専門店が並ぶ。店頭看板のほか食品サブル、メニューなど飲食店に必要な品は何でも揃っており、思わぬ掘出物も見つかる。
- ・明治15年(1882)頃、法善寺の千日前から四天王寺のお大師さんや今宮戎神社への参道として栄えたこの道筋に古道具屋や雑貨商が軒を連ねたのが「道具屋筋」の起こりとされる。昭和10年(1935)頃から順次、「飲食店の道具」を売る専門店が増え、昭和45年にはアーケードを建設、昭和60年に「第1回道具屋筋まつり」を開催するとともに10月9日を「道具の日」と定め、この頃から東京の道具街「合羽橋」との交流が深まった。
- ・中間付近の西側には、カウンター席の小さな飲食店やバー・飲み屋がひしめく「千日地蔵尊通り横丁」もある。

「千日前セントラル」 浪速区難波千日前9

- ・道具屋筋商店街の手前・東側に昭和21年に開館したロードショウ館(客席452席)であったが、平成18年9月に閉館。「ターミネーター2」や「タイタニック」も上映された。2階にコーヒー豆の焙煎工場とケーキ厨房があった。ビル経営者は喫茶店チェーン「キーフェル」も経営しており、その利益で映画館を維持していたとされる。その跡には「千日前セントラル第1ビル」が建っている。

”なんさん通り”

- ・高島屋の前から南海電鉄高架の東沿いを南下して難波中2交差点を東へ折れ、堺筋の日本橋3交差点へ至る約500mの道路で、明治41年(1908)の市電南北線(大阪駅前～恵美須町)敷設に伴い整備されたもので、市電は昭和38年に廃止された。難波駅前電停と日本橋筋3丁目電停を結ぶ通りであることから”なんさん(難三)通り”と呼ばれるようになった。
- ・通り沿いには、三菱UFJ銀行難波駅前支店・難波支店・日本一支店、無印良品難波店、なんばロフト、タワーレコード難波店などが並ぶ。

(2)「でんでんタウン」 浪速区日本橋・恵美須町

- ・”なんさん通り”の南側と日本橋筋(日本橋3～5丁目)周辺に、広がる電器店街。
- ・江戸時代には「長町」と呼ばれた古くからの宿場町であり、明治以降には古書店街として賑わっていたが、戦後になって自作ラジオ向けパーツや工具などを扱う店が増え出し、電気街として発展した。真空管などを探しに行ったことが思い出される。
- ④古書店として有名なのは、「天牛書店」…大正4年(1915)、日本橋南詰を東に入った所に出店して店舗を拡張。階上には「道頓堀倶楽部」という浄瑠璃や舞などの貸席を設けて、大阪一の古本屋に。織田作之助や折口信夫らも常連客として通ったという。この頃には”学生の街、青春の街”とも称され、学生達が古本を持ち寄って小遣いを得、千日前や新世界へ繰り出したとされる。
- ・東京の秋葉原と並ぶわが国の2大電器店街で、電機・オーディオ・大工道具・工具・機械・パソコン等の専門店が建ち並んでいたが、「ニノミヤムセン」や「マツヤデンキ」、「関西ケースデンキ」(旧・「八千代ムセン電機」)といった老舗店も撤退し、現在では、わずかに「上新電機」のみが本社といくつかの店舗を構えている。(昭和30年頃から第1次電化ブームが起こり、昭和40年代から各店がチェーン店展開を図った。)

近年では、パソコン、オーディオ機器関係が中心で、その他ゲーム・アニメのDVD、フィギュアや模型を扱う店舗が目立ち、“なんさん通り”の周辺では秋葉原と同様にコスプレ、メイドカフェ等が登場し、“オタク街化”もみられる。

「上新電機本社」 浪速区日本橋西1丁目6

・昭和9年(1934)に浄弘信三郎(ジョウク シンサブロウ)が、現・木津卸売市場で青果仲買商「上新」を創業したのが始まりである。屋号の「上新」は、自身の姓名“浄信”の字を“上新”と置換えたもので、“上質で新鮮な”の意味合いも込めて受け継いできた。

・戦災で青果仲買商を廃業したあと、昭和23年5月に日本橋で「上新電機商会」として家電業に進出し、昭和51年11月には大阪最大の大型店舗「上新電機日本橋本店」を開設した。その後、「ジョウシン(Joshin)」のブランド化により全国的チェーン化を進め、平成15年からは阪神タイガースとスポンサー契約を結んで、選手ヘルメットにロゴマークを掲出し、現在はコマースにタイガースの選手を起用している。

・本社のほか、日本橋最大級の売場面積で家電とパソコンの大型専門店「ジョウシン日本橋1ばん館」(昭和54年10月開設＝浪速区日本橋5丁目1)、パソコン・デジタルカメラ・スマートフォン・組立パソコンパーツを扱う大型情報機器専門店「J&Pテクノランド」(昭和54年10月開設＝日本橋5丁目6)、大型免税店「スーパーでんでんランド」を併設した玩具・模型専門店「スーパーキッズランド本店」(日本橋4丁目12)および「スーパーキッズランドキャラクター館」(日本橋4丁目10)が周辺に並んでいる。

「五階百貨店」(「日本橋商店会」)

・日本橋4丁目の堺筋から一つ西隣の筋に電器商が集まる地域を指す名前。

・明治21年(1888)、この地に5階建て・高さ31mのパノラマタワー「眺望閣」が建設された。「眺望閣」は、六角柱状パノラマ式高塔で、日本で最初の西洋式高層建築ともいわれ、梅田北の「凌雲閣」(明治22年建設、9階建て)が「キタの九階」と称されたのに対し、「ミナミの五階」と称されたが、明治37年頃に取壊された。

眺望閣を目当てに大勢の観光客が押し寄せ、周辺に多数の露店が集まって賑わったため、当時の流行語であった“百貨店”と合わせ、この地区が「五階百貨店」と呼ばれるようになった。(5階建て百貨店があった訳ではない。)

現在では、「でんでんタウン」の一部として、「日本橋商店会」とも称され、一画には“大阪名物 五階”の看板を掲げた3階建ての「新五階ビル」がある。

「高島屋・東別館」(もと 浪速区日本橋3丁目5

・「松坂屋大阪店」は大正12年(1923)、現在地に木造3階建ての仮建築で開店し、昭和9年(1934)10月に地上7階・地下2階建てビルが建設された。1階にはアーチが並び、幾何学的なアールデコスタイル装飾を施したテラコッタによるファサードが特徴で、「東洋一の百貨店建築」と称され、平成31年に国の有形文化財に登録された。

・その後、8階建てに増築されたが、昭和41年(1966)に松坂屋大阪店が天満橋に移転したため、昭和43年に「高島屋・東別館」(事務所スペース)となり、昭和45年には高島屋の株式会社設立50周年事業として3階に「高島屋史料館」が開設された。

・令和2年1月、内部が全面改築され、1～7階部分に滞在型ホテル「シタディーンなんば大阪」(313室)がオープンしている。



5. 難波駅の西部と南部地域

(1)「大阪府立体育会館」(「浪速区難波中3丁目4

・昭和27年(1952)12月、講和条約締結を記念し総工費1億4千万円を投じて建設されたもので、その開館式には高松宮殿下の御臨幸があった。

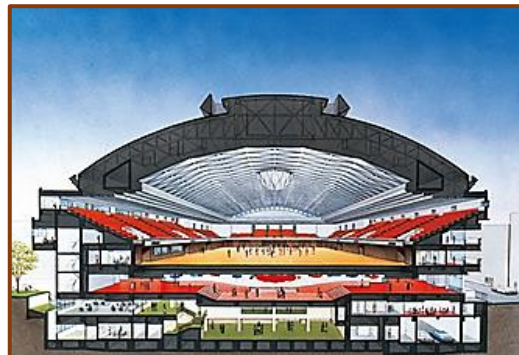
・昭和28年3月から大相撲春場所(3月場所・大阪場所)が定期開催されている。特に令和2年の春場所は、“新型コロナウイルス”の感染拡大期にあたり、中止も検討されたが、大相撲史上初の“無観客(テレビ中継のみ)場所”として15日間興行され、気合を入れるためマワシを叩く音や立会時の力士同士がぶつかる音、組あった力士の荒い息遣い等が茶の間まで届き話題を呼んだ。

また、かつてはプロレスやプロボクシングの格闘技のほかバレーボール、バスケットボール、卓球、バドミントンといった屋内球技や体操競技の大会会場とされ、全日本男女選抜バレーボール大会も開かれた。

・建設当初は、飛行機用格納庫の骨組みを使った鉄骨製体育館(2階建て)であったが、老朽化に伴う全面改築工事が行われ、昭和62年(1987)1月に地上4階・地下2階建ての現在の姿に生まれ変わった。

館内には、第1競技場と第2競技場(フロア34mX27m)があり、柔道場・剣道場のほか多目的ホール・会議室が付設されている。第1競技場はフロア70mX43mで3・4階に固定席が3131席あり、催しによってフロアにアリーナ席が設けられる。

・平成24年から施設命名権制が導入され、平成27年9月から「エディオンアリーナ大阪」の名称になっている。



(2)「浪速スポーツセン」浪速区難波中3丁目8

・この地には、明治19年(1886)に移転された「大阪市立難波小学校」(明治7年・創立)があったが、昭和60年4月に隣接する「大阪市立元町小学校」と統合されて「大阪市立難波元町小学校」となり、もと元町小学校の校舎に移設された。(後述)

・その跡地に、市立のスポーツセンターとして開設されたもので、屋内球技用の「第1体育場」、柔剣道用の「第2体育場」、「多目的室」と「浪速アイススケート場」(60mX30mのリンク)およびトレーニングルームを付設した「浪速屋内プール」(25mX8コース)が設けられている。その運営は指定管理者として「明治スポーツ・セントラルスポーツG」が担っており、同社の各種スポーツ教室が開かれている。

(3)「ヤマダ電機」(「LA 浪速区難波中2丁目11

・平成18年3月にオープンしたヤマダ電機のターミナル駅隣接の都市型大規模量販店である「LABI」(ラビ)の1号店。LABIは、「LIFE ABILITY SUPPLY」の略。

・地下1階・地上9階建てで、地下1階から4階までを売り場とし、5階から9階までと屋上は駐車場。日本最大級の約6千坪のスペースに家電から書籍、おもちゃまで約80万点の品揃えを誇る。4階フロアには、女性や子供向け書籍や玩具を置くなど家族連れを意識した構成とし、イベントスペース「LABI Gate」も併設されている。

・「ヤマダ電機」は、山田昇が昭和48年に群馬県前橋市で個人商店の「ヤマダ電化

センター」(ナショナルショップ)を開店したのが始まり。北関東を中心に拡大をはかり、平成11年に八幡市で関西第1号店を開店以降、全国展開を行って平成17年には家電量販店で初の全都道府県進出を果たした。本社は現在も前橋市に置いている。

(4)「(株)浪速区敷津東1丁目2(「ヤマダ電機」の通り南側)

- ・農業機械メーカーの最大手である「(株)クボタ」の本社ビル(8階建て)が、昭和35年(1960)に新設されたが、昭和52年10月には、その南側に16階建ての本社新館が建設されて移転し、敷地内には別館ほか体育館や健保会館も整備されている。なお、旧本社ビルは「クボタ第2ビル」として、関係グループ各社の本社が入っている。
- ・「クボタ」は、明治23年(1890)に大出権四郎が鋳物メーカー「大出鋳造所」を創業したことが始まりとされている。その後、創業者が久保田家の養子となったことから、「久保田鉄工所」と改称され、株式会社になったあと、平成2年の創業100周年を期して、現在の「(株)クボタ」と社名変更された。
- ・本社の南側には、明治時代から続く「船出町工場」があり、昭和中期には自動体重計やたばこ自動販売機等の主力製造工場とされたが、手狭なこともあり、昭和48年に久宝寺工場が新設されたことを機に閉鎖され、解体された。

(5)「なんば住宅博」 浪速区敷津東1丁目1

- ・かつて大阪球場がその役目を終え解体されるまでの間、球場グラウンドには住宅展示場が設けられていたが、解体工事が始まると展示場は球場南側にあったゴルフ練習場跡地西側部分に移され、平成10年4月に「なんば住宅博」として開場した。
 - ・平成18年8月、この地域の再開発に伴って、通り南側(「クボタ」の東側)に移転し、現在に至っている。敷地内には「インフォメーションセンター」(南端)のほか、19棟のモデルハウスが揃う都市型住宅展示場となっており、自由に見学出来る。
- ⑨主なモデルハウス…三井ホーム、ヘーベルハウス(旭化成)、住友林業、セキスイハイム、大和ハウス、タマホーム、ミサワホーム、泉北ホームなど

(6)「南海難波第1ビル」と「Zepp」浪速区敷津東2丁目1

- ・住宅博の通り南(もと「クボタ船出町工場」跡地)に、平成25年2月、地上12階建ての複合ビル「南海難波第1ビル」が竣工した。なんば駅西側の「南海会館」の建替え(現「なんばスカイオ」)に伴い、同ビルにあった南海電鉄本社が4～11階に移転した。2・3階には大阪府立大学のサテライトキャンパス(「I-siteなんば」)が置かれている。
- ・同敷地内(東側)には、平成24年4月に「Zepp Namba」(2階座席440席と1階スタンディングとを合わせたキャパは2500人)が新築された。大阪南港・咲洲にあった「Zepp Osaka」が移ってきたもの。

(7)「なんばグランドマスターズ」浪速区敷津東2丁目8

- ・上記ビルの南側(工場跡地)に平成22年6月竣工した地上33階・地下1階建て超高層タワーマンション(321戸)。
- なお、このマンションの東(南海電鉄高架の先)に「広田神社」、その南には「今宮戎神社」がある。

(8)「大阪木津地方卸売」浪速区敷津東2丁目2

- ・民営で日本最大級の規模を誇る卸売市場で、通称「木津卸売市場」「木津市場」とも呼ばれ、民設の卸売市場では唯一、水産(55社)と青果(40社)の双方を取扱う。
- ・江戸時代後期に官許を受けた市場として発足。大正2年(1913)には難波青物市場と木津魚市場が合併し、「木津難波魚青物市場」となったが、昭和6年に「大阪中央市場木津配給所」として自主運営が認められ、昭和13年(1938)には現在地に移転して「木津卸売市場」となり、昭和48年に「大阪木津地方卸売市場」と改称した。
- ・平成22年、リニューアル化によって食材センターやスーパー銭湯(太平の湯)などが新たに併設され、一般客も受け入れる施設に転換した。

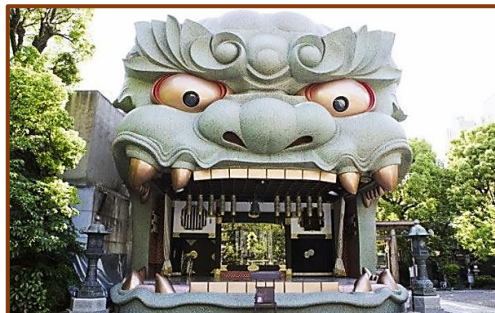
- (9)「浪速区役所」 浪速区敷津東1丁目4
 ・現庁舎は、地上7階・地下1階建てで、7階に会議室、地下1階に駐車場がある。浪速区は大正14年(1925)4月に「南区」から分区して誕生した区で、昭和18年(1943)に区域変更があり、現在の区域となった。旧西成郡難波村・今宮村・木津村・西浜町からなり、北は南区(西道頓堀川)、南は西成区(JR環状線)、東は天王寺区、西は西区(木津川)に囲まれ、面積は4.39km²で、日本一面積の小さな行政区である。
- (10)「フェアフィールド・バイ・マリオット大」 浪速区元町2丁目3
 ・令和2年7月にオープンした米マリオット・インターナショナル系ホテル。地上14階建てで客室数は300室。ダイニングとカフェ、フィットネスルームを備える。
- (11)「日本工芸館」 浪速区難波中3丁目7
 ・昭和25年北区堂島に私立博物館として開館し、昭和35年、現在の場所に城郭をアレンジした鉄筋コンクリート造り3層2棟の建物を新築し移転してきた。
- (12)「センタラ・ホテル&リゾート」 浪速区難波中2丁目20
 ・ヤマダ電機の東側(もと住宅博)で駐車場の北部分にホテル建設が進められている。計画では、地上34階(高さ141.5m)の超高層タワーホテルで、客室数515室、令和5年3月の竣工予定である。(センタラ・ホテルの本社はタイ・バンコック)
- (13)「泉陽興業」 浪速区元町1丁目8
 ・昭和33年(1958)11月の設立。「暮らしの中にゆとりと遊び」をテーマに、大規模遊園地やテーマパークなどのレジャー施設の企画・建設・経営を展開しており、大阪では天保山大観覧車や枚方パークの遊具施設などを手掛けている。
- (14)「瑞龍寺」(通称:「鉄眼」) 浪速区元町1丁目10
 ・黄檗宗萬福寺末寺で、本尊は薬師三尊。創建年月は不明であるが、寛文10年(1670)に鉄眼禅師が再興され、「瑞龍寺」と改称された。俗に「鉄眼寺」と呼ばれる。鉄眼は黄檗宗の隠元和尚に心服し、全国を巡って托鉢で浄財を募り、延宝6年(1678)一切経の版木6956巻32万頁を完成した。うち48千余枚の版木が萬福寺塔頭宝蔵院の収蔵庫に納められ、重要文化財になっている。また、窮民の救済に尽くして“救世の大士”といわれ、境内に「鉄眼禅師茶毘(ダビ)処地」の碑が建っている。
 ・昭和20年の大空襲で全焼したが、同24年に本堂が木造で再建され、その後、鉄筋コンクリート造に造り直された。
- (15)「唯専寺」 浪速区敷津西2丁目13
 ・“木津御坊唯専寺”と呼ばれる真宗大谷派の寺院。明応7年(1498)坊舎が建立され、天正7年(1579)12月に「唯専(ユイセン)寺」の号が授与された。
 ・境内には寛永14年(1637)鑄造の梵鐘や木津勘助の墓があり、門前に「木津勘助翁墓所」の碑が据えられている。
 「木津勘助」… 天正14年(1586)生～万治3年(1660)歿・享年75才。
 ・本名を「中村勘助」といい、慶長から元和にかけて土木事業で活躍した。木津川を開削して「勘助島」を開発し、木津村在住であったことから「木津勘助」と呼ばれる。
 ・“大坂の陣”のあと市中に残された戦死者の処理に尽力したことで知られ、寛永18年(1641)の飢饉においては米蔵を急襲して奪い取った米を困窮する民に施し、その罪で島流し(死罪とも)にあったとの逸話が残るが、不詳な点も多い。
- (16)「敷津松之宮神社」(「大国」) 浪速区敷津西1丁目2
 ・「敷津松之宮」と、“木津の大国さん”で知られる「大国主神社」とが相殿している。
 ・社伝によれば、神功皇后が三韓を平定されて住吉大社に凱旋報告のため、敷津浦を航海されたとき、敷津浜に打ち寄せる荒い波を見られて、渚に松の木を三本植え、素戔鳴尊(スサノミコト)をお祀りになって航海の安全を祈られたことから「松之宮」と呼

ばれたとある。

- ・「大国主神社」は、延享元年(1744)2月に神託があり、出雲大社を勧請して建立されたとされる。”木津の大国さん”として親しまれ、道頓堀川に架かる「大黒橋」は当社への参道にあたることに由来し、「大黒町」という町名や駅名も社名に由来する。
- ・境内には「木津勘助の銅像」(大戦で供出され、昭和29年・再建)がある。

(17)「難波八阪神社」 浪速区元町2丁目9

- ・創建年月は不明であるが、社伝によれば、古来「難波下の宮」と称し、難波一帯の産土神(ウブスナガミ=守護神)であった。
- ・現在の本殿は、昭和49年(1974)5月に建てられたもので、毎年1月に催行される”綱曳神事”は御祭神の素盞鳴尊が八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を退治し、民衆の困苦を除かれた故事に基づき始められたと言われる。



本殿と同じく、昭和49年5月に建立された「獅子殿」という素盞鳴尊の荒魂を祀る大きな獅子頭の形をした舞台(高さ12m、幅11m)があることでも知られる。

(18)「願泉寺」 浪速区大国2丁目2

- ・永正4年(1507)に現在地に移設され、その後、天台宗から浄土真宗へ改宗した。
- ・天正10年(1582)に兵火に罹り焼失したが、慶長2年(1597)再建、寺名を願泉寺と改称した。かつては、伊達政宗の寄進した国宝の書院や茶室があったが、戦災で焼失した。しかし、相阿弥作とされる枯山水の庭園は、戦災を免れ、現存している。

(19)その他、学校等

市立「日本橋中学校」(「日本橋 浪速区日本橋西 1丁目7

- ・昭和24年(1949)4月、「大阪市立浪速第二中学校」として現・浪速区下寺3丁目に開校した。その後、「大阪市立浪速東中学校」と改称されたあと、昭和31年9月、現在地に移転し、現在の「大阪市立日本橋中学校」と改称された。
- ・平成29年4月に南側に併設された市立「浪速小学校」と小中一貫教育校とされ、「日本橋小中一貫校」となった。現在、大阪市立の小中一貫校は計5校ある。



「日本橋小中一貫校」新設校舎

市立「浪速(ナミヤ)小学校」

- ・平成29年4月に、市立の「日本橋小学校」・「恵美小学校」・「日東小学校」の3校が統合して設立されるとともに「日本橋小中一貫校」となった。
- 校舎地はもと「関谷町公園」(昭和26年開園)で、北側の「日本橋中学校」の運動場として使われていた。

「日本橋小学校」=明治5年創立。日本橋3丁目(高島屋東別館の東側)

「恵美小学校」=明治6年創立。恵美須西2丁目

「日東小学校」=大正13年創立。日本橋東3丁目

市立「難波元町小学校」浪速区元町1丁目5

- ・昭和60年4月に児童数の減少に伴い、「市立難波小学校」と「市立元町小学校」が統合され、もと「元町小学校」の地で「大阪市立難波元町小学校」となった。
- ・卒業生は市立「木津中学校」(昭和30年創立、浪速区戎本町1丁目)へ進学する。
- ・平成3年から、学校・PTAと難波元町地域9町会合同の「ふれあい運動会」が毎年、校庭で開催されている。

「難波小学校」 浪速区難波中3丁目8

- ・明治7年(1874)、現・浪速区元町2丁目の月江院に創立され、明治19年に現・浪速区難波中3丁目(府立体育会館の南側)に移転した。
- ・跡地は、「浪速スポーツセンター」となっている。(上述)

「元町小学校」 浪速区元町1丁目5

- ・明治39年(1906)4月、難波小学校から分離する形で現在地に創立された。

「エール学園」 浪速区難波中3丁目9・13

- ・昭和42年に発足し、難波経理学院と難波予備校を開校。その後、各種専門学校を拡充し、平成18年にエール予備校・エールネットワーク専門学校・テラ外語専門学校を統合し、学校法人「エール学園」として統一した。
- 現在、国際ビジネス学科・国際コミュニケーション学科・コンピュータービジネス学科・応用日本語学科・日本語教育学科・大学受験専科(予備校)が設置されている。

「大阪中華学校」 浪速区敷津東1丁目8

- ・昭和21年(1946)に「関西中華国文学学校」として開設され、その後、現校名に改称されて、昭和31年1月に現在地に移転した。
- ・中華民国系の中華学校で、中学部・小学部・幼稚園部が置かれ、華僑・華人への教育が行われている。

もともとは大阪在住の華僑子弟への教育目的で創設されたが、台湾および中国大陸から仕事で来日している人の子弟も受け入れている。

「市営日本橋住宅」 浪速区日本橋5丁目20・15・16ほか

- ・平成2年・5年・8年・12年にわたって、1号館から5号館の計5棟、14階建て(1号館のみ12階建て)の市営高層住宅が建てられた。2K・2DK・3DKの全468戸。この地にあった市営の戸建て住宅や集合住宅を整備したもの。
- ・少し西側に、平成11年竣工の14階建て「市営日本橋西住宅」(1棟・104戸)およびその南側に平成23年竣工の「市営広田住宅」1号館(37戸)もある。

「愛染橋病院」 浪速区日本橋5丁目16

- ・日本初の孤児院である「岡山孤児院」を創設し、「児童福祉の父」と呼ばれた石井十次が、明治42年(1909)、愛染橋西詰に「愛染橋保育所」を開所したが、志半ばにして亡くなった。石井と親しかった倉敷紡績社長・大原孫三郎がその志を継いで「(財)石井記念愛染園」を設立し、昭和12年(1937)、愛染橋東詰(浪速区日本橋東3丁目＝もと市立日東小学校)に「愛染橋病院」を開院した。平成17年8月、現在地に新病院(253床。地上10階・地下1階)が新築されて移転してきた。総合周産期母子医療センターに認可されている。

②周産期母子医療センター＝周産期(出産前後)に係わる高度医療が可能な施設
・西隣に平成13年4月開設の「グループホームあいぜん」と「特別養護老人ホームあいぜん」が併設されている。